

下肢のむくみ——リンパ浮腫

子宮頸癌（しきゅうけいがん）の術後等に続発する下肢の慢性リンパ浮腫は、未だにより治療法も無く、その治療には悩みが多い。昭和45年に大学病院で手術を受け、その後再発も無く元気に過ごしているという白髪の老婆が、紹介状を携えて外来を訪ねて来た。当時の先生は既に大学病院を辞めていて、福島県のある地方都市で開業されており、その先生を訪ねて病状の経過を診てもらっていたが、「年もとったし、通って診てもらうには遠いこともあって、先生のところで経過を診てもらいたい」という内容であった。

内診所見では局所の再発所見も無く、何も言うことは無かったが、左の下肢がリンパ浮腫のために象の足のようむくんでいた。「どうして左足だけがこんなに腫れ上がるのでしょうか？足を曲げることもできず、正座ができないので困っています」とげげん怪訝そうに問うてきた。

このようなリンパ浮腫の主因は、こつばんくう骨盤腔の外科的リンパ節かくせい廓清よって生じる下肢のリンパ液の流れが障害されるために起こるもので、術後の創部癒痕拘縮（そうぶはんこんこうしゅく）よって深い静脈の狭窄（きょうさく）が生じたり、放射線治療よって皮下組織が線維化して、なお一層症状を悪化させるのである。リンパ浮腫が慢性化して、時には炎症を伴うようなことになると、発熱し、疼痛（とうつう）のために歩行できないこともあり、厄介なことになるので、普段から利尿剤や消炎剤等を投与して予防している。四肢の慢性のリンパ浮腫は、治療に苦渋することが多いが、骨盤内のしゅよう腫瘍や病状の悪化による下肢の浮腫はもっと大変である。

長い間、再発のために入退院を繰り返していたある患者さんが「先生、いよいよ終わりですね・・・」と私の反応を求めてきた。「どうしてですか？だいぶよい状態になってきたでしょう！心配しないでゆっくり休んだらよいでしょう」と言って視線をそらせた。「分かっているんです。昔から足に“むくみ”が出るようになると長くないと言うじゃないですか！」と真剣に言い返してきた。「もう何も悔いはありません。ただ苦しまないようにだけして下さい」と言って手を握ってきた。数日後に、この患者さんは他界された。

リンパ浮腫は、もっと急激に両方の下肢から下腹部にかけて溜まってくることもある。そんな時には動くこともできず、呼吸もできないほど苦しくなることもあり、やむなく皮下のあちこちに針を刺し、リンパ液を流出させることもある。これほど医療技術が進歩したというのに、ゴムの木に傷を付けるような方法で・・・それでも一日に1000・以上も出て、一時的に下肢の浮腫が消失して喜ばれることもある。しかし、それはほんの一時的なことにすぎず、それ以上の効果は期待できないことが多い。

長い入院中、回診の度に針穴から流出するリンパ液で濡れたガーゼを換える手もとを見つめながら、「先生、この辺に刺したらどうでしょう・・・」「そうだね、だけど痛くはないの？」「楽にさえなれば我慢しますよ！」

苦渋を取り除いてあげなければならない立場にありながら“こんなことが”と思うようなことができない。未だに解決できていないことに苛立ちを感じる。この患者さんもしばらくしてから他界された。